日本デザイン協会 デザインフォーラム 1

「デザインを楽しく学ぶ」子どものデザイン教育を考える （抄録）

当日会場風景

開催日時　：　平成２０年３月３１日　午後１時３０分より午後６時まで
開催場所　：　東京ミッドタウン・デザインハブ　九州大学・芸術工学東京サイト
東京都港区赤坂９－７－１　ミッドタウンタワー５階

パネラー　：　定村俊満（社団法人日本サインデザイン協会副会長）環境デザイン
山田晃三（株式会社GKデザイン総研広島）デザインディレクター
國本桂史（名古屋市立大学芸術工学部教授）プロダクトデザイン
コーディネーター：宮沢功（日本デザイン協会）環境デザイン

最近の日本のデザインには目を見張るものがありますが、それに伴って不必要なデザイン、やりすぎたデザインなども多く見られます。戦後発展してきたデザインは本当に人のためになっているのか。デザインは人の心に訴え、その感性は日本人一人一人の心の中に育まれなければなりません。これからの日本のためのデザイン感覚育成について三人のパネラーとともに考えます。

定村氏はデザインリーグの教育関連活動の中で、プロのデザイナーを対象にした「デザイン塾」、障害者と一緒に過ごすユニバーサルキャンプイン、専門家の指導で実際的なワークを通して実感させる「スクールキャラバン」、大学生と企業を引き合わせる企業研修授業「デザインインターンシップ」等々、様々な形の体験型デザイン教育活動の経験から、現在の教育が受験のための記憶力をベースにした教育に偏重しており、何もないところから物を作りだす発想力、ルーチンではないやり方を見つけ、自分で方法を考える工夫をする力が相当落ちていると指摘しています。

デザインは社会を良くするために物を美しく、街をきれいにするという役割があり、それには子供の頃から美しいものに触れ感性を養うことが必要です。定村氏は建築も含めてデザインとはコミュニケーションアプローチだと言っています。デザイナーはコミュニケーションドクターで、見立てができないとだめなのです。デザインというのはそういう能力なのです。それは子供たちに置きかえれば、自分で発想して、何かを自分で見つけて、それを実現するということです。だからそれを小学生、子供たちに今伝えないと日本はルーチンの中でしか動かない国になってしまうという危険な状況にあると言っています。

國本氏は「人がいかに心地よく快適に暮らせるか」を活動の基準とし、それを具現化するためのデザイン活動を行っています。そして未来につなぐデザインのためには「哲学を持った思考力」が大切と説いています。デザイン教育を考えるとき小学校というのが大切な時期です。人は10歳までに自分の生活空間で起きる事象をアイコン化し、それによって様々なものを組み立てます。10歳を超えるとそれぞれの国の文化の違いによって同じアイコンでも違う意味を持ってしまい、大人が大学教育を受けた後でデザインを考えると、限定された文化と生活の延長線上でのアイコンによってデザインしてしまい、世界共通にならないのです。そういう意味で、もう一つ学校ではない新しいプラットホームを作らなくてはいけないだろうと思います。

今の子供たちは、参考書で勉強したり答えがあるものに対してはめきめきと上達します。しかし学校に入ってから新しいこと、答えのないものを作り出すことが非常に苦手になってきています。このような事からデザインの教育とは、わくわく、どきどき、にこにこ、つまりやる前もわくわくしていて、やっている時も興奮してどきどきし、終わったらにこにこできる事が必要です。これは物を作る場合も、デザイン教育もそうです。私はこれが欠けていると思います。デザイン教育はそこのところにぜひ力を入れる必要があると思います。

山田氏は義務教育の中でデザインを通して何を伝えられるのかをテーマに愛媛県立とべ動物園の経験からいろいろな動物の話をされました。例えば、アマゾンに住む毒を持つヤドクガエルが、俺には毒があるということを周りにアピールするために、見事な白と黒と黄色のカラーリングになっている警告的擬態、ミミズクムシの幼虫が、内臓を全部中心部にずっと固めて、足を見事に折りたたんでじっと葉っぱの上に留まって天敵のカマキリから見を隠す隠蔽的擬態、トラやシマウマの縞の話、オスの孔雀がなぜあんな美しい羽を持っているのかというような興味深い事例を紹介し、生きていく上で必要な工夫のこと、これが実はデザインだと言っています。

そして、文科省のキャリア教育について、デザインを教えるということの最大の課題がここにあるとしています。つまり「デザインは美術、工芸の一分野」で美術の時間の一領域、あるいは図工の中の一つみたいな位置づけになっていてデザインが特殊な世界になっているのです。センスという言葉があります、センスを身につけるということに対して二つの力の話があります。一つは観察する力、もう一つは表現する力、これは子供たちに是非、覚えてもらいたいことです。観察力は、これは物をよく見て察する力、観察というのは五感でするのだということです。僕はこの表現力をかき立てる授業というのは美術と音楽と体育、この三つだと思っています。

以上三人のパネラーの話の後、会場を含め議論をしました。紙面の都合で議論の詳細は省略しますが，相対的には今までのデザインの役割を肯定しつつも，これからは人の感性や文化的視点でのデザインの役割をより推進するために産業のみでなく，人のためになるデザイン教育について様々な視点から考えたいと思います。　（文責/宮沢　功）

なお、当日の詳細記録については本部事務局までお問い合わせください